

発掘された鈴鹿 2014

2015年 3月28日(土)～6月21日(日)



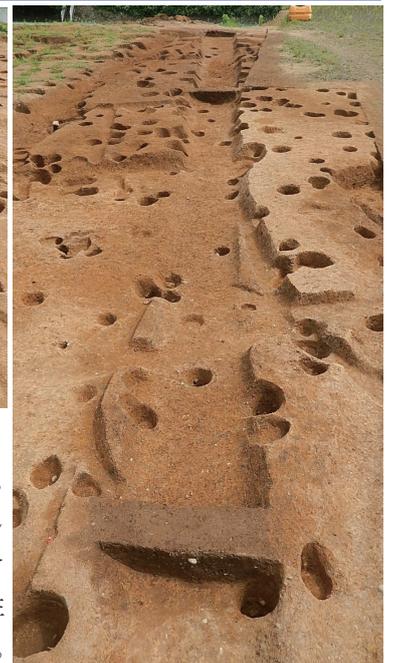
磐城山遺跡 (第6-2次, 7次) 木田町 6-2次: 3月6日～3月25日, 7次: 4月2日～9月30日
農地改良工事に伴う緊急調査

鈴鹿川左岸の丘陵上に立地し、眼下には鈴鹿川が東流しています。今年で5ヵ年継続して発掘調査していますが、相変わらず弥生時代後期(1,800年くらい前)と古墳時代後期(1,500年くらい前)の竪穴住居跡がたくさん確認されています。これまでに200棟近くの住居跡が見つかっていて、当時は絶好の居住地であったようです。



弥生時代の竪穴住居跡 (西から)

また、7次調査区の西端には、飛鳥時代～奈良時代頃のまっすぐな溝が確認されました。これまでの調査でも部分的には見つかっていましたが、総延長が62mもあることが判明しました。さらに、南側の市道の発掘調査区では、この溝が西側へ直角に曲がって続いています。どうも、この中に何か重要な施設が存在するようです。古代豪族である大鹿氏の居住地もこの辺りですので大鹿氏の居館跡や、古代河曲郡に関わる役所施設などが考えられます。発掘調査は今後も継続する予定ですので、いずれその正体が明らかになるはずです。



古代の区画溝 (北から)

戦前の鈴木敏雄氏の記録では墳長38.3mの前方後円墳で、周囲に周溝と周堤を有していたそうです。現在は後円部のみが直径25m、高さ5mの高まりとして残されています。発掘調査は、この古墳の正確な規模や年代等を確認するための学術調査として実施しました。第1次調査では、墳丘に十文字のトレンチを設定しました。その結果、後円部の径が約28～29mで、深さ0.5mあまりの周溝がめぐり、墳丘の裾には葺石が施されていることが確認されました。

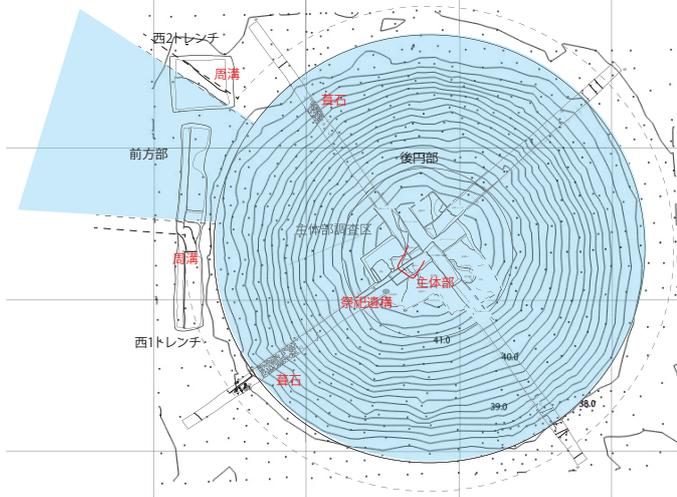
第2次調査では、前方部と埋葬主体部の調査を行いました。前方部については幅8mのくびれ部を確認し、後円部に比べて、幅の狭く短い前方部を持つことが確認されました。埋葬主体部の調査では、過去に大規模な盗掘が繰り返えされたようで、木棺を葬ったとみられる主体部(墓坑)の西端とそれに伴う緑灰色の粘土床が確認されたのみで、他の部分は破壊され、副葬品なども全く残っていませんでした。しかし、墳頂部の西端から土師器台付甕と須恵器蓋坏が出土し、埋葬に伴う何らかの祭祀行為が行われた跡とみられます。出土した須恵器からこの古墳は6世紀の初頭に築かれたとみられます。首長の墓としてそれなりの規模を持っていますが、埴輪



主体部調査区 (南西から)



主体部断面図 (南から)



墳丘実測図 (1:250)

が全く出土していないのが不思議です。



祭祀遺構 (北西から)



1トレンチくびれ部 (南から)

伊勢国府跡 (長者屋敷遺跡第31次・32次) 広瀬町 1月15日～3月31日 学術調査

第31次調査は、国府跡北方の方格地割の北辺外郭の土地利用を確認するための調査です。方格地割の北の要の金敷(建物基壇か?)の東西に伸びていると推定される「北限大溝」や住居群の確認を期待して3本、延長約100mのトレンチを設定しましたが、古代の遺構は全く確認できませんでした。

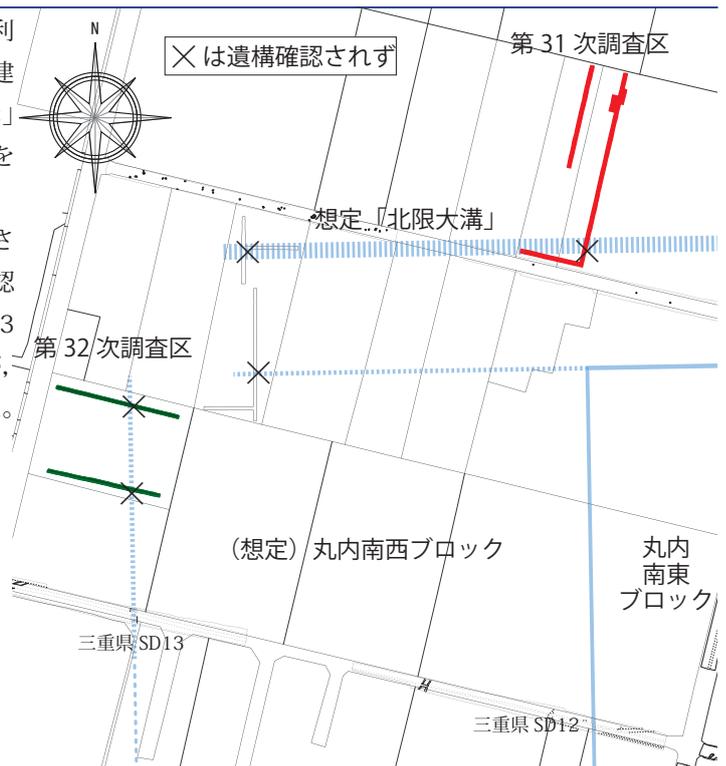
第32次調査は、三重県埋蔵文化財センターによって提唱された拡大方格地割案による「丸内南西」ブロックの有無確認のための調査です。平成6年に三重県が確認した南北溝SD13の延長を求めて、東西トレンチを2本平行して入れましたが、天地返し(土壌改良)が行われていて基盤層はがたがたでした。結局、溝と思われる落ち込みは確認されませんでした。



第31次調査区 (北から)



第32次調査風景 (東から)



調査区配置図 (1:2,000)

鈴鹿川右岸の標高 10 m 程度の低地に位置します。遺跡の周辺には、過去、鈴鹿川の支流が幾筋も流れていたと想定できます。

昨年の発掘調査では、方形にまわる溝の存在から、居館施設の存在を推定したところでした。残念ながら、今年の調査では、そのような施設は存在しなかったことが確認されました。あたかも方形にみえていた溝は、自然の力で形成された河道であったようで、下流では蛇行しながら東へと流れていきます。

ただし、この河道が埋まっていく土の中には、今から約 1,500 ～ 1,400 年前の古墳時代の須恵器や土師器が膨大な量が含まれていました。このことは、大量の土器を消費していた集団が上流にいたことを物語っています。

上流にある、八重垣神社遺跡や河田宮ノ北遺跡などに、豪族居館跡があるのかもしれません。



耳飾 (東から)



遺物を多く含む旧河道 (北から)



土師器壺 (西から)



遺物の出土状況 (北西から)



須恵器高杯 (西から)

天王遺跡 (第15次) 岸岡町 10月1日～10月31日 集合住宅建築に伴う緊急調査

天王遺跡は鈴鹿川右岸に形成された段丘がちょうど海岸平野に埋没していく先端部に位置します。北側を金沢川、南側を田古知川に挟まれ、東側には伊勢湾の海岸平野の水田地帯が広がり、標高 5 m 前後の半島状の微高地になります。田古知川の南には独立丘陵岸岡山が立地し、丘陵全域に弥生時代から古墳時代の集落遺跡である岸岡山Ⅲ遺跡が分布しています。また、丘陵全域と東側の浜堤上には前方後円墳を含む 40 基あまりの岸岡山古墳群や須恵器の窯跡が分布しています。

これまで天王遺跡では 14 回の調査が行われ、主に弥生時代から中世の遺構・遺物が確認されています。弥生時代には 2 重の濠で囲まれた集落が営まれていました。飛鳥時代から奈良時代にはコの字や L 字状に計画的に配置した大型の掘立柱建物群が確認され、伊勢湾に近い立地から、それらの建物群は港湾施設であった可能性が考えられています。鎌倉時代の出土遺物に「北 庖」と書かれた土器があります。「庖」とは伊勢神宮の所領である御厨におかれた供御物を収納するための建物を意味することから、この地に御厨が存在したと考えられています。

今回の調査地は、遺跡の辺縁部にあたり、コの字状に配置された建物群から約 100 m ほど北に位置し、関連する遺構の検出が期待されました。

今回の調査では、中世の溝や時期不明の柱穴などを検出しました。9 ～ 11 次調査では中世の掘立柱建物や井戸が検出されていますが、300 m ほど離れており、これらとの関係性は不明です。

今回、期待された弥生時代から奈良時代遺構は確認されませんでした。しかし、遺跡の辺縁部にまで遺構が広がっている状況が確認でき、貴重な成果を得ることができました。



調査区全景 (西から)

鈴鹿川右岸に向かって突き出した段丘の先端という絶好の場所に立地する中世城館です。土塁がL字状に延長約80mにわたってよく残っています。太陽光発電施設建設に際して、土塁の大部分は保護していただけることになりましたが、進入路となる土塁の南端が削平されることになったため記録保存とすることになりました。土塁は、表土の黒色土層を基底部幅約5.0m、高さ約1.0mの土手状に削り出して基盤としたうえ、砂礫土、黒色土を交互に約1.5m積み上げた高さ2.5m程度のもので、盛土自体は荒く、しまりも無い簡易なつくりです。しかし、現在舗装道路となっている部分は、鈴鹿川の谷底平野から切れ込んだ堀割りの跡で、そちらからの侵入者にとっては十分堅固な土塁という印象を与えたでしょう。



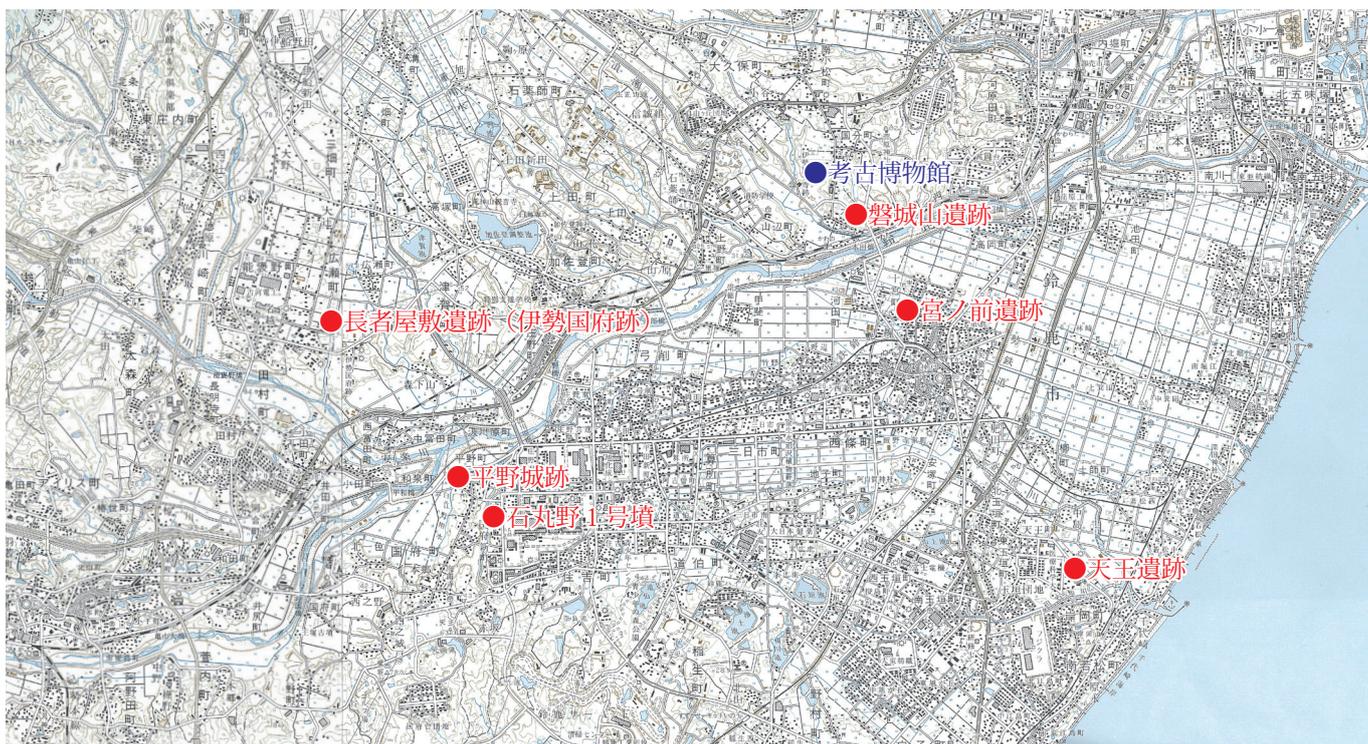
土塁調査前状況（南東から）



土塁内郭（南西から）



土塁断面（南から）



発掘調査遺跡位置図（1:100,000）

この地図は国土地理院発行の5万分の1地形図「四日市」「亀山」を使用したものである。

関連講演（解説 当館職員）

発掘担当者による展示解説 4月18日（土）①9時半～ ②13時半～（考古博物館特別展示室）
 スライド説明会「宮ノ前遺跡（第3次）・磐城山遺跡（第6-2次、7次）・石丸野1号墳（第2次）」
 5月9日（土）14時～（考古博物館講堂）



鈴鹿市考古博物館

Suzuka Municipal Museum of Archaeology

〒513-0013 鈴鹿市国分町224番地 TEL059-374-1994 FAX059-374-0986
 URL <http://www.edu.city.suzuka.mie.jp/museum/> E-mail kohokubutsukan@city.suzuka.lg.jp